

# 十萬石

泉鏡太郎

青空文庫



## 上

こゝに信州しんしゅうの六文錢ろくもんせんは世々よゝゝ英勇えいゆうの家いへなること人の能よく識しる處ところなり。はじめ武田家たけだけに旗下きかとして武名遠近ぶめいゑんきんに轟とどろきしが、勝かつよりめつばうつよりめつばうのの後年のちしを経て徳川氏とくがはしに歸順きじゆんしつ。松代まつしろ十萬石じふまんごくを世襲せしふして、松の間詰まつまづめの歴々れきくたり。

寶曆ほうれきの頃ころ當城たうじやうの主眞田伊豆守幸豊公あるじさなだいづのかみゆきとよぎみ、齡よはひわづかに十五ごながら、才敏さいびんに、徳高とくたかく、聰明そうめい敏達びんたつの聞きこえ高たかかりける。  
 晝ひるは終日ひねもす兵術へいじゆつを修しうし、夜よるは燈下とうかに先哲せんてつを師しとして、治ち亂興廢らんこうはいの理りを講かうずるなど、頗すこぶにる古いにしへの賢主けんしゆの風ふうあり。

まめやか  
 忠實つかに事へたる何なにがし某なにかとかやいへりし近侍きんじの武士ぶし、君きみを思ふおも  
 ことの切せつなるより、御身おんみの健康けんかうを憂慮きづかひて、一時あるとき御前ごぜんに罷まかり  
 出で、「君學問きみがくもんの道みちに寢食しんじよくを忘れ給ふは、至極しごく結構けつこうの  
 儀ぎにて、とやかく申まをしあ上げむ言ことばもなく候へども又また御心遣おんこころやりの  
 術すべも候はでは、餘あまりに御氣おきの詰つまりて千金せんきんの御身おんみにさはりとも相あ  
 成ひならむ。折節をりふしは何なにをがな御慰おんなぐさみに遊あそばされむこと願ねがはしく候さふらふ  
 と申まをしあ上げたり。

えうくんごきげんつる  
 幼君御機嫌美こころづはしく、「よくぞ心附こころづけたる。予よも豫かねてより  
 思おもはぬにはあらねど、別べつに然しかるべき戲たはむれもなくてやみぬ。汝なんぢ何なんなり  
 とも思おも附おもひつきあらば申まをして見みよ。」と打解うちとけて申まをさるゝ。「され  
 ばにて候さふらふ、別段べつだん是これと申まをして君きみに勸すすめ奉たてまつるほどのものも候さふらふはねど

ふとおもひつ  
不圖思附きたるは飼鳥かひどりに候、彼を遊ばして御覽候へ」といふ。

えうくん  
幼君、「飼鳥かひどりはよきものか」と問はせ給へば、「いかにも御お

んなくさみ

慰まをになり申すべし。第一だいいちお眼覺めざめの爲ために宜よろしからむ。いかに

まを

と申せば彼等早朝かれらまだきに時ときを定めて、ちよくと轉さへづり出いだすを機しほに

ごしんしつ

御寢室いでを出させ給たまはむには自然御眠氣しぜんおねむけもあらせられず、御心おんこゝ

ちよろ

地宜ちよろしかるべし」といふ。幼君えうくん思おぼしめし召まをに協かなひけん、「然しから

こころ

ば試かみに飼かふべきなり。萬事ばんじは汝なんぢに任まかすあひだ良よきに計はからひ得えさせ

よ」とのたまひぬ。

かしこ

畏なまりて何某なにがしより、鳥籠とりかごの高たかさ七尺しちしやく、長ながさ二尺にしやく、幅はび

ろくしやく

六尺ろくしやくに造りて、溜塗ためぬりになし、金具かなぐを据すゑ、立派りっぱに仕上しあぐる

やく作事奉行さくじぶぎやうに

申渡まをしわたせば、奉行ぶぎやう其旨承りて、早速城さつそくじ

やうか  
 下より細工人の上手なるを召出だし、君御用の品なれば  
 費用は構はず急ぎ造りて參らすべしと命じてより七日を経て出  
 來しけるを、御居室の縁に昇据ゑたるが、善美を盡して、眼を  
 驚かすばかりなりけり。

幼君これを御覽じて、嬉しげに見えたまへば、彼勧めたる何

にがしめんぼくほどこ

某面目を施して、件の籠を左瞻右瞻、「よくこそしたれ」と

賞美して、御喜悅を申上ぐる。幼君其時「これにてよ

きか」と彼の者に尋ねたまへり。「天晴此上も無く候」と只

管に賞め稱へつ。幼君かさねて、「いかに汝の心に協へるか

、」とのたまひける。「おほせまでも候はず、江戸表にて將

軍御手飼の鳥籠たりとも此上に何とか仕らむ、日本一に

て候。<sup>さくらふ</sup>」と餘念も無き體なり。

「汝の心に可しと思はば予も其にて可し、」と幼君も満足し

て見え給へば、<sup>みたま</sup>「然らば國中の鳥屋に申附けあらゆる小鳥を

才覺いたして早御慰に備へ奉らむ、」と勇立てば、<sup>はななくさみそなたてまつ</sup>「否、追

てのことにせむ、先づ其まゝに差置け、」とて急がせたまふ氣色

無し。何某は不審氣に跪坐たるに、<sup>なにがし いぶかしげ ついゐ</sup>幼君、「予は汝が氣に

入りたり。汝が可しと思ふことならば予は何にても可し、些變り

たる望なるが、<sup>のぞみ なんぢおもひつき</sup>汝思附の獻立を仕立てて一膳予に試みし

めよ」といかにも變りたる御望。<sup>かは おんのぞみ</sup>彼者迷惑して、「つひ

に獻立を仕りたる覺えごぎなく、<sup>こんだて つかまつ おほ</sup>其道は聊も心得候はね

ば、<sup>ぶてうはふ さくらふこのぎ</sup>不調法に候、此儀は何卒餘人に御申下さるべし」と

困こうじたる状さまなりけり。

幼えうくん君、「否いや、予よは汝なんぢが氣きに入りたれば、餘人よじんにては氣きに入ら

ず、獻こんだて立たては如何いかやう様にても可よし、凡およそ汝なんぢが心こころにて此これならば可よしと

思おもはば其それにて可よきなり、自みづかう旨うましと存ぞんずるものを予よに構かまはず仕つかまつれ

とまた他事たじも無なくおほすれば、不得やむをえず止とどまらば、「畏かしこまり候さくらふ」と御請申おうけまを

して退まかんで出でける。

さて御料理番おれうりばんに折入をりいつて、とやせむかくやせむと評議ひやうぎの上うへ、

一いつ通つうの獻立こんだてを書附かきつけにして差上さしあげたり。幼君えうくんたゞちに御披ごひ

見けんありて、「こは一段いちだんの思附おもひつき、面白おもしろき取合とりあ合せなり。如い

何かに汝なんぢが心こころにもこれにて可よしと思おもへるか」と御尋おたづねに、はツと平へ

伏いふくして、「私不調法わたくしなてうはふにていたし方かたごぎなく、其それが精一杯せいいつぱいに



候さくらふたひあせと額に汗あせして聞きこえ上あぐる。幼えうくんにつこ君莞爾と打うち笑ゑんみ給たまひて、「可よし、汝なんぢころが心こころにさへ可よしと思おもはば満まん足ぞくせり。此このとほり通りの獻こんだて立て二人にんまへ前みやうにち、明みやうにち日の晝ちうじき食こしらに拵らふるやう、料れうりばん理番に申まを置しおくべし、何なにかと心こころづか遣かひいたさせたり、休きうそく息せよとて下さげられ  
たりける。

さて其そのよくじつ翌ひ日ひ「日さくの昨ごこんだての御できあが獻さくらふは立や出た來ま上り候候、早ためまさせ給たまふべきか」と御ごぜんぶかた膳ぶかた部うか方がより伺うかへば、しほしとありて、彼かの何なにがし某をを御ご前ぜんに召めさせられ、「近ちかきうちとに鳥とりを納いれむと思おもふなり。先まづ鳥とり籠ごの戸とを開あけて見みせよ」とある。

縁えんがは側はに行ゆきて戸とを開ひらき、「いざ御ごらんあそ覽あそ遊ばさるべし」と手てを支つかふ。一ちよいと寸そのなか其はひ中みに入はひつて見みよ」と口くちがる輕まをに申まをされければ、彼か

をとり  
 の男ハツといひて何 なにごころ 心なく籠かごに入る。幼君えうくんこれを見給みたまひて、  
 「さても好きよ恰かつかう好かなかな」と手てを拍うちてのたまへば「なるほど宜よろ  
 しく候さきからふ」と籠かごの中なかにて答こたへたり。

幼君えうくん「心地こゝちよくば其それに居あて煙草たばこなど吸すうて見みせよ。それく」と、坊主ぼうずをして煙草たばこ盆ぼんを遣つかはしたまふに、彼かの男少をとまこしく狼狽うろたへ、

「こはそも、其それに置おかせたまへ」と慌あわただしく出いでむとすれば、

「いやく其處そこにて煙草たばこを吸すひ心長閑はなに談はなせよかし」と人弱ひとよわら  
 せの御慰おなぐさみかしこ、賢かごくは見みえたまへど未だ御幼年ごえうねんにましましけり。

籠かごの中なかなる何なに某がしは出いづるにも出いでられず、命おほせに背そむかば御咎おとが  
 めあらむと、まじくとして煙草たばこを吸すへば、幼君えうくん左右さいうを顧かへりみ給たま  
 ひ、「今いまこそ豫かねまをしおき二人前ににんまへの料理れうり持もて參まゐれ」と命めいぜらる。

既すでに獻こんだて立たして待まちちたれば直ただちに膳ぜんぶ部ぶを御ご前ぜんに捧さげつ。「いま一  
 膳ぜんはいかゞ仕つかまつらむ」と伺うかへば、幼えうくん君くん「さればなり其膳そのぜんは籠かごの  
 中なかに遣つかはせ」との御意ぎよ、役やく人にん訝ぶかしきことかなと御顔おんかほを瞻みまりて  
 猶ためら豫らへり。

幼えうくん君くんは眞顔まがほにて、「苦くるしからず、早遣はやちかはせ」と促うながし給たまふ。さ

ては仔細しさいのあることぞと籠かご中このなかの人に齎ひとらせたり。彼かの男をとこ太いた

く困こうじ、身みの置おき處どころ無なき状さまにて、冷汗ひやあせ搔かきてぞ畏かしこりたる。

爾時そのとき幼えうくん君くんおほせには、「汝なんぢが獻こんだて立たせし料理れうりなれば、嚙さ甘ぢま

からむ、予よも此處こゝにて試こころむべし」とて御箸おんはしを取とらせ給たまへば、恐おそ

るく、「御料理おんれうり下くださる段だん、冥加みやうが身みに餘あまり候さふらへども、此中このなかに

て給たまはる儀ぎは、平ひらに御免ごめん下くだされたし」と佗わびしげに申まを上しあぐれば、

幼君、なになぐさみ「何も慰なり、辭退せず、そのなか其中にて相しやうばん伴せよ」と

斷つての仰おほせ。

なぐさみ

慰にとのたまふにぞ、くる苦しき御伽を勤むると思ひつも、石を

噛み、砂を嘗むる心地して、ちんさい珍菜佳肴も味無く、やうくしに伴

やうばん

食すれば、幼君えうくん太く興いたじ給ひ、なん「何なりとも氣きに協かなひたる

を、飽あくまで食しよくすべし」と強しひつ附けく、御菓子、濃茶、薄茶、

などを籠かご中このなかとこ所狭せまきまで給たまはりつ。とかくして食しよく事終れば、

續つゞきてはじまる四方山よもやまの御物語おんものがたり。

一時餘いつときあまり經ちぬれども出いでよとはのたまはず、はた出いだし給たま

ふべき様子やうすもなし。彼者かのもの堪たまり兼ねて、もはや「最早御出おだし下くださるべし、

御慈悲ごじひに候こたてまつ」と乞こたてまつひ奉る。

幼君えうくんきつとならせ給たまひて、「決して出いづることあひならず一  
 つしやうそのなか 生 其中くらにて暮くらすべし」と面おもてを正ただしてのたまふ氣色けしき、戯たはむれとも  
 思おもはれねば、何なに某餘がしめのことに言ことも出いでず、顔かほの色いろさへ蒼あをざめた  
 り。

幼君えうくん「さて何なんにても食しょくを好このむべし、いふがまゝに與あたふべきぞ、  
 退たい屈くつならば其そのなか中なかにて謠うたも舞まひも勝手かつてたるべし。たゞ兩りやう便べんの  
 用ようを達たす外ほかは外そとに出いづることを許ゆるさず」と言いひ棄すてて座ざを立たち給たまひ  
 ぬ。

御側おそばの面々めんく鳥籠とりかごをぐるりと取卷とりまき、「御難澁ごなんじふのほど察さつし  
 入いる、さてく御氣おきの毒どくのいたり」と慰なぐさむるもあり、また、「こ  
 れも御奉公ごほうこうなれば怠懈おこたり無く御勤おつとめあるべし、上かみの御慰おんなぐさに

ならるゝばかり、別に煩雜しき御用のあるにあらず、食は御  
しよくおこの  
 好次第ね寝るも起るも御心まかせ、さりとは羨ましき御境遇  
おこゝろ  
さきからふに候」と戲言を謂ひて笑ふもあり、甚しきに到りては、「いか  
ざれごと  
かた／＼に方々、御前へ申し、何某殿の御内室をも一所に此  
ごぜん  
まを中へ入れ申さむか、雌雄ならでは風情なく候」などと散々  
つかひ  
かごのなか籠中の人聲を震はし、「お人の悪い、斯る難儀を興がりて  
ひとこゑ  
ふるなぶり給ふは何事ぞ。君の御心はいかならむ、實に心細く  
たま  
なにごとなり候」と年效もなく涙を流す、御傍の面々も笑止に思ひ、  
さきからふ  
としがひ  
なみだ  
なが  
おそば  
めんく  
せうし  
おも  
 「いや、さままでに憂慮あるな、君御戲に候はむ、我等おとり  
きづかひ  
きみ  
おたはむれ  
さわら  
われら  
まをなし申すべし」といふ。「頼入候」と手を合さぬばかりに  
たのみいり  
さからふ  
て  
あは  
 なむ。

それよりいちどう一いろくまを同種々申して渠を御前にわびたりければ、えうく幼  
 君ふたゝび御出座ありて、かごのなか籠中ひとむかの人の向はせられ、「其その  
ほう方さほどまでにくる苦しきか」とあれば、「いかにもたへがた堪難く候、  
かひどり飼鳥をお勧め申せしは私わたくしつせい一世の過失、御宥免ありたし」  
ひたすらと只管にわび奉りぬ。「然らば出いでよ。敢て汝を苦めて慰みに  
しよぞんせむ所存はあらず」と許し給ふに、且かつ喜び、且かつ恐れ、籠よ  
ていりはふはふの體にてにじり出でたり。「近ちかう來い、申聞かすこ  
みなものとあり、皆の者もこれへ參れ」と御聲懸に、御次に控へし面  
のこ々も残らず左右に相詰むる。  
 伊豆守幸豊君、御手を膝に置き給ひ、頭も得上げで平伏  
かせる彼の何某をきつと見て、「よくものを考へ見よ、汝が常に

す  
 住まへる處、知らず、六疊か、八疊か、廣さも十疊に過ぎ  
 ざるべし。其に較べて見る時は、鳥籠の中は狭けれども、二疊  
 ばかりあるらむを、汝一人の寢起にはよも堪難きことあるまじ。  
 そのうへしごと  
 其上仕事をさするにあらず、日夜氣まゝに遊ばせて、食物  
 のぞみしだい、海のもの、山のもの、乞ふにまかせて與へむに、悲  
 は望次第、海のもの、山のもの、乞ふにまかせて與へむに、悲  
 む理由は無きはずなり。然るに一時と忍ぶを得ず、涙を流して  
 きううつた、ひたすらかご  
 窮を訴へ、只管籠を出でむとわぶ、汝すら其通りぞ。況して  
 てうるぬ、くわうだいむへん  
 鳥類は廣大無邊の天地を家とし、山を翔けり、海を横ぎり、  
 じざい、こくう、わうらい  
 自在に虚空を往來して、心のまゝに食を啄み、赴く處の時に宿  
 る。さるを捕へて籠に封じて出ださずば、其窮屈はいかならむ。  
 じんこう、たくみ  
 また人工の巧なるも、造化の美には如くべからず、自然の佳



味みは人ひと造つくらじ、されば、鳥とり籠かごに美びを盡つくし、心こころを盡つくして餌えを飼かふ  
 とも、いかで鳥てうるゐ類こころの心こころに叶かなふべき。  
 今いましも汝なんぢが試こころみつる、苦くつう痛もつを以もつて推すゐして可かなり。渠かれら等らとても人ひと  
こころの心こころと何なか分わかちのあるべきぞ。他たを苦くるめて慰なぐさまむは心こころある者もののす  
 べきことかは、いかに合がてん點てんのゆきたるか」と御おん年とし紀し十五ごの若わか君ぎみ  
 が御おん戒いましめの理ことわりに、一いつ統とう感かん歎たんの額ひたひを下さげ、高たかき咳きはする者もの無なく、  
 さしもの廣ひろ室まも蕭せう條でうたり。まして飼か鳥どりを勸すすめし男をとこは、君きみの御ご  
 前ぜん、人ひとの思おもはく、消きえも入いりたき心こころ地ちせり。  
 幼えう君く面おもてを和やはらげ給たまひ、「斯かう謂いはば汝なんぢは太いたく面めん皮びを缺かむが、  
 忠ちう義ぎのほどは我われ知しれり。平へい生せいよよく事つかへくれ、惡あしきこととて更さら  
 に無なし、此この度たび鳥とりを勸すすめしも、予よを思おもうての眞まご心こころなるを、何なにと

てあだに思ふべき。實は嬉しく思ひしぞよ。さりながら飼鳥は  
 良き遊戯にあらざるを、汝は心附かざりけむ、世に飼鳥を好  
 む者、皆其不仁なるを知らざるなるべし、はじめよりしりぞけて  
 用ゐざらむは然ることながら、さしては折角の志を無にして汝  
 の忠 心露れず、第一予がたしなみにならぬなり。人の心の變  
 り易き、今しかく賢ぶりて、飼鳥の非を謂ひつれど、明日  
 を知らず重ねて勧むる者ある時は、我また小鳥を養ふ心になるま  
 じきものにあらず、こゝを思ひしゆゑにこそ罪無き汝を苦しめた  
 り、されば今日のことを知れる者、誰か同一き遊戯を勧めむ。よ  
 し勧むるものあればとて、予が心汝に恥ぢなば、得て飼ふことを  
 せまじきなり。固より些細のことながら萬事は推して斯くの如け

む、向後かうご我身わがみの慎みつゝしのため、此上このうへも無なき記念きねんとして、彼かの鳥とり籠ごは床とこに据すゑ、見みて慰なぐさみとなすべきぞ。斯かる風聞ふうぶん聞きこえなば、  
 一家中いつかちゆうは謂いふに及およばず、領分内りやうぶんないの百姓ひやくしやうまで皆みな汝なんぢに鑑かんみ  
 て、飼鳥かひどりの遊戯あそび自然止しぜんむべし。さすれば無用むようの費つひえを節せつせむ、汝なんぢ  
 一人いちにんの奉公ほうこうにて萬人ばんにんのためになりたるは、多おほく得難えがたき忠義ちうぎ  
 ぞかし、罪無つみなき汝なんぢを辱はづかしめつ、嘸心さぞしんぐわい外おもに思おもひつらむが、予よを  
 見棄みすてずば堪忍かんにんして、また此後このごを頼たのむぞよ」懇ねんごろにのたまひつも、  
 目録もくろくに添そへて金子きんす十兩じふりやう、其賞そのしやうとして給たまひければ、一度いちど  
 は怨うらめしとも口惜くやしとも思おもへりしが、今いまは只涙たなみだにくれて、あはれ此こ  
のきみ君きみのためならば、こゝにて死しなむと難ありがた有たがる。一座いちざの老らうしよ  
くかほみあは職しやく顔見合あはせ、年とし紀恥はづかしく思おもひしとぞ。

此君このきみにして此臣このしんあり、十萬石じふまんごくの政治せいぢを掌たなに握そこりて富國ふこく強兵やうへいの基もとを開ひらきし、恩田おんだ全もくは、幸豊公ゆきとよぎみの活眼くわつがんにて、擢ぬきんで出でられし人ひとにぞありける。

下

眞田家さなだけの領地りやうち信州しんしう川中島かはなかじまは、列國れつこくに稀まれなる損場そんばにて、とし／＼の損毛そんまう大方おほかたならざるに、歴世れきせい武ぶを好む家柄いへがらとて、殖産しよくさんの道發みちはつたつ達たつせず、貯藏ちよざうの如何いかんを顧みかへりざりしかば、當時たうじの不如意ふによい謂いはむ方無かたなかりし。

既すでに去さる寛保くわんぽ年中ねんちう、一時いちじの窮きうを救すくはむため、老職らうしよくの輩はい

が才覺さいかくにて、徳川氏とくがはしより金子きんす一萬兩いちまんりやう借用しやくようありしほど

なれば、幼君えうく御心おんこころを惱なやませ給たまひ、何なんとか家政かせいを改か革かくして國くにの

柱はしらを建たて直たださむ、あはれ良りやう匠しやうがなあれかすと、あまたある臣し

下等んかどもに絶たえず御眼おんめを注そがれける。

一夜いちや幼君えうくん燈火とうくわの下もとに典籍てんせきを繙ひもときて、寂寞せきぼくとしておはし

たる、御耳おんみみを驚おどろかして、「君きみ、密ひそかに申まを上あぐべきことさくらふの候と

御前ごぜんに伺しかう候せしは、君きみの腹心ふくしんの何なに某がしなり。幼君えうくんすなはち禡しとね

間ま近く近ちかづけ給たまひて、「豫かねて申まを附しつけたる儀ぎはいかゞ計はからひしや」

「吉報きつぱうを齎もたきくらふ候えうくんうれ幼君えうくん嬉うれしげなる御氣色おけしきにて、「そは何なにより

なり、早はやく語かたり聞きかせ」「さん候さくらふ、某それ仰ほせたまは、多たじ日やま病まひと稱しようして引ひ

籠きこもり、人知ひとしれず諸家しよかに立入たちいり、内端うちわの様子やうすを伺うかひ見みるに、御勝ごか

つつつつつつつつつつ
 手て空くしく御手許不如意なるにもかゝはらず、御家中の面々、分わ
 けて老職の方々、はいづれも存外有福にて、榮耀にええう
 暮くらすやに相見え候、さるにても下男下女どもの主人を悪あしざまにまを
 申し、蔭言を申さぬ家としては更さらになく、また親子夫婦相親まを
 み、上下和睦して家内に波風なく、平和に目出度きところはまを
 稀まれに候、總じて主人が内にある時と、外に出でし後と、家内のまを
 有様は、大抵天地の違あるが家並いへに候なり。然るに御老まを
 職末席なる恩田空殿方は一家内能く治まり、妻女は貞まを
 に、子息は孝に、奴婢の輩皆忠に、陶然として無事なること恰あたか
 も元日の如く暮され候。されば外見には大分限だいぶんの如くなれまを
 ど、其實清貧なることを某觀察仕りぬ。此人こそ其まを

のみさ身治まりて能家の治よくいへまれるにこそ候をさはめ、必かならず治績ちせきを擧あげ得うべく  
と存ぞんざじ候くらふ」と説とくこと一いちばん番。

幼えうくん君手てを拍うちて、「可よし、汝なんちが觀みる處ところ予よが心こころに合かなへり、予よも  
豫かねて柁もくをこそと思おもひけれ、今いま汝なんぢが説とく所ところによりて、愈いよく々かれ渠じが人  
材んざいを確たしかめたり、用もちゐて國くにの柱はしらとせむか、時じ機き未まだ到いたらず、人ひとに  
は祕ひせよ」とぞのたまひける。

斯かくて幸ゆき豊とよ君ぎみは柁もくを擧あげて、一いつこく國こくの老らう職しよくとなさむと思おも  
はれけるが、もとより亂らん世せいにあらざれば、取とり立たててこれぞとい  
ふ功てがは渠かれに無なきものを、みだりに重おもく用もちゐむは、偏へん頗ぱあるやうに  
後うしろ暗めく、はた柁もくを信しんずる者もの少もけければ、其その命めい令れいも行おこはれじ、  
好よき機をりもがなあれかすと時じ機きの到いたるを待まち給たまひぬ。

寶曆五年春三月、伊豆守江戸に參觀ありて、多日在  
 府なされし折から、御親類一同參會の事ありき、幼君  
 其座にて、「列座の方々、いづれも豫て御存じの如く、某勝  
 手不如意にて、既に先年公義より多分の拜借いたしたれど、  
 なかく其にて取續かず、此際家政を改革して勝手を整へ  
 申さでは、一家も終に危く候。因りて倩々案ずるに、國許  
 に候恩田空と申者、老職末席にて年少なれど、き  
 つと器量ある者につき、國家の政道を擧げて任せ申さむと存  
 ずるが、某も渠も若年なれば譜代の重役をはじめ家中の者  
 ども、決して心服仕らじ、しかする時は空が命令行はれで、  
 背く者の出で來らむには、却て國家の亂とならむこと、憂慮しく



候さくらぶい。就おまかては近頃御無心ながら、各位御列席かくみにて空もくに大權たいけんを  
 御任せ下されたし、さすれば、各位の御威徳おもに重きを置おきて、是ぜ  
 非ひを謂いふものあるまじければ、何卒左様御計なにとぞさやうおはからひ下されたくだたく候さくらぶい」  
 と陳のべられしに、一門方いちもんがた幼君えうくんの明智めいに感かんじて、少時しばらくはたゞ  
 顔かほを見合みあはされしが、やがて御挨拶ごあいさつに、「御不如意ごふによいの儀ぎはいづれ  
 も御同様ごどうやうに候さくらぶいが、別べつして豆州づしう（幸豊ゆきとよをいふ）には御先代ごせんだいよ  
 り將軍家しやうぐんけにまでも知しれたる御勝手ごかつて、御難儀ごなんぎの段察だんさつし入いる處ところなり。  
 然しかるに御家來ごけらいに天晴あつぱれきり器量きりやうじ人候をくらぶとな、祝しづち着やく申まをす。さて其そのも  
 の者とりたを取立とつるに就つきて、御懸念ごけねんのほども至極しごく致いたせり。手前等てまへら  
 より役儀やくぎ申まをしつさくらぶいけ候こと、お易やすき御用ごように候さくらぶい、先まづ何なにはしかれ其その空く  
 とやらむ御呼寄およびよせあひなるべし」「早速さつそくの御承引ごしやういん難ありがたくさぶ有有」

候らふ」そのひと其日は館やかたに歸かへらせ給たまふ。其それより御國おく許にもとへ飛脚ひきやくを飛とばして、御用ごようの儀ぎこれあり、諸役人しよやくにんども月番つきばんの者もの一名宛いちめいづくのこり殘と止どまり、其他そのたは恩田おんだ柵もく同道どうだうにて急きふく々しゆつぶ出府しゆつぶ仕かまつるべし、と命めいじ給たまひければ、こはそも如何いかなる大事だいじの出來できつらむと、取とるものも取とり敢あへず、夜よに日ひについて出府しゆつぶしたり。

いづれも心こころも心こころならねば、長途ちやうとの勞らうを休やすむる閑ひまなく、急いそぎ様や子うすうを伺かだてまつなにごとに何事なにごともおほせ出いだされず、ゆるきうそくく休息きうそくいたせとあるに、皆みな々く不審ふしんに堪たへざりけり。中なか一ふつか日か置おきて一いち同どうを召出めしださる。依よつて御前ごぜんに伺候しかうすれば、其座そのざに御親類ごしんるゐ揃そろはせられ威儀堂ゐぎだう々くとして居流ゐながれ給たまふ。一いち同どうこれはと恐おそれ謹つしみけるに、良やありて幸豊公ゆきとよぎみ、御顔おんかほを斜なく見返みかへり給たまひ、「柵もく、柵もく」と

召し給へば、遙か末座の方にて、阿と應へつ、白面の若武士、少しく列よりずり出でたり。

其時、就中御歳寄の君つと褥を進め給ひ、「御用の趣

餘の儀にあらざ、其方達も豫て存ずる如く豆州御勝手許不如意

につき、此度御改革相成る奉行の儀、我等相談の上にて、

空汝に申付くるぞ、辭退はかまへて無用なり」と嚴に申渡

さるれば、並居る老職、諸役人、耳を欬て眼を睜れり。

老公重ねて、「これより後は汝等一同空に従ひ渠が言に

背くこと勿れ、此儀しかと心得よ」と思ひも寄らぬ命なれば、

いづれも心中には不平ながら、異議を稱ふる次第にあらねば、

止むことを得ずお請せり。

前刻ぜんこくより無言むごんにて平伏へいふくしたる恩田おんだ杵もくは此時このときはじめて頭かうべ
 を擡もたげ、「ものかずの數かずならぬ某それがしに然さる大役たいやくを命おほせつけ下くだされ候さくらふこ
 と、一世いつせいの面目めんぼくに候さくらへども、暗愚斗あんぐと箆せうの某それがし、得えて何事なにごとをか
 仕出しいだし候さくらべき、直々ちきく御訴訟ごそしやうは恐おそれ入り候いさくらが、此儀このぎは平ひらに御
 免下めんくださるべく候さくら」と辭退じたいすれば、老公らうこう、「謙讓けんじやうもものにぞ
 よる、君きみより命めいぜられたる重荷おもにをば、辭じして荷になはじとするは忠ちゆうに
 あらず、豆州づしゆうが御勝手ごかつて不ふ如意にいなるは、一朝いつてう一夕いつせきのことにはあ
 らじを、よしや目覺めざましき改かい革かくは出でき來きずとも、誰たれも汝なんぢの過あやまち失あつ
 とは謂いはじ、唯誠たまことをだに守まもらば可かなり。とにもかくにも試こころみよ」と
 寛裕くわんゆうなる御言おんことばの傍そばよりまた幸豊公ゆきとよぎみ、「杵もく、辭退じたいすな
 へ、俄にはかに富とみは造つくらずとも、汝なんぢが心こころにて可よしと思おもふやうにさへいた

せば可し」と觀るところを固く信じて人を疑ひ給はぬは、君が賢明なる所以なるべし。

此に於て空は最早辭するに言無く、「さまでにおほせ下され候へば、きつと畏り候、某が不肖なる、何を以て御言に報い奉らむ、

たゞ一命を捧ぐることをこそ天地に誓ひ候へ」と思ひ切つてお請申せば、列座の方々満足々々とのたまふ聲ずらりと行渡る。但老職諸役人は不満足の色面に露れたり。

空逸早くこれを悟りて、きつと思案し、上に向ひて手を支へ、それがわも「某重き御役目を蒙り候上は一命を賭物にして何にても心のまゝにいたしたく候。さるからに御老職、諸役人いづれも方某が言に背かざるやう御約束ありたく候」と憚る處も無く申上ぐ

れば、御年役おんとしやくぎこ聞し召し、もつとも「道理の言條いひでうなり」とてすなはち  
 いちどう 一同に誓文せいもんを徴ちようせらる。

老職らうしよくの輩やからは謂いふも更さらなり、諸役人等しよやくにんらも、愈出いよくふでて、愈不

平へいなれども、聰明そうめいなる幼君えうくんをはじめ、御一門ごいちもんの歴々方れきくがのこ、殘

らず御同意ごどういと謂いひ、殊ことに此席このせきに於おて何なにといふべき言ことばも出いでず、

私わたくしも儀ぎ、何事なにごとに因よらず改かい革かく奉ぶ行ぎやうの命めい令れいに背そむき候きらふまじく、

いづれも空もくどの殿て手足あしとなりて、相あひ働はたらき、忠勤ちうきんを勵はげみ可まをすべ

申くさ候らふと、澁々しぶく血判けつぱんして差上さしあぐれば、御年役おんとしやく一應いちおう御覽ごらん

の上うへ、幸豊公ゆきとよぎみに參まゐらせ給たまへば、讀過どくくわ一番いちばん、領うなづき給たまひ、卷まき

返へして高たかく右みぎ手に捧さげられ、左ひだり手を伸のべて「空もく、」「は」と申まを

して御間近おんまぢかに進すすみ出いづれば、件くだんの誓文せいもんをたまはりつ。幼君えうくん

快くわい活くわつ  
なる御おん聲こゑ  
にて、

「予よが十じふ萬まん石ごく勝かつ手てにいたせ。」

明治三十年十月





# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「十萬石《じふまんごく》」とルビがついて  
います。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 十萬石

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>